

マイルス・デイヴィスはJAZZ界の帝王

マイルス・デイヴィスは1926年（昭和元年）アメリカイリノイ州オールトンで父は歯科医、母はピアノとヴァイオリンをマスターしていて裕福かつ音楽と身近な環境で育った。ちょうど生誕100年にあたり、彼の曲を聴いてみたい。（1991年 65才で没）

彼は1940年半ばから約45年間、多くのミュージシャンに強い影響や進むべき道を示唆し、常に一步先を進む存在だった。ジャズシーンで常にトップを走り、ヒットを生み、それは常に一步先を進み、半世紀にわたってJAZZを発展させてきたまさにすごい人です。JAZZ界ばかりで無く、すべての音楽に影響力を及ぼしました。けっして過去を振り返らずミライを向いていました。

『JAZZ』はアフリカ系のアメリカ黒人たちの労働歌（Work Song）＋ブルース（Blues）＋ラグタイム（Ragtime）＋黒人ブラスバンド（ニューオーリンズの伝統的葬送行進曲）＋ヨーロッパの古典音楽（Classics）。さらに黒人霊歌と彼らの（黒人の）宗教意識とが裕吾されて生まれてきた。ニューオーリンズでは1900年位からあちこちで生まれてきた。

1940年代

戦争前はスイング（ダンス音楽）が主体で、ビッグバンドが主流であったが次第に小編成へと変わってしまう。けれどダンスの伴奏でなく、編曲の縛りでなく、アドリブを目指す仲間が増えてゆく。コード進行を土台にして、コードの構成音に変化を持たせたり変化を加えたり、リズムの細分化など即興演奏＝ビバップと呼ばれてゆきます。

1950年代

第二次世界大戦の終わりで少し社会不安が縮小し、未来志向がJAZZにも影響を与えます。センチメンタルでリラックスしたいいわゆるクールJAZZが支持されハード・ポップが派生する。クラシックとJAZZとの結合が多くなり、タキシード着用して演奏することも行われた。

ニューヨークは経済が停滞し、カルホルニアは朝鮮戦争による好景気と鳴りました。白人ミュージシャン率の高さ、複数の管楽器、サックス・ホルン・オーボエなどの採用。ウエストコーストジャズです。

この頃、EPレコード・LPレコードが広まり、ジャケットやパッケージの重要性がポイントになってきます。何より、録音時間からの開放はすべての音楽にとって大きな出来事です。今まで以上に大衆化の波が押し寄せます。

1960年代

黒人の人権問題、公民権運動が先鋭化してゆく。ロックンロールが誕生しロックが白人に支持されてゆく。同じ根っこを持ちながらも黒人の守備範囲が少なくなっていくが、同調や迎合でない道を目指す。ヨーロッパでのモダニズム（近代主義）批判とアヴァンギャルド（前衛的）がアヴァンギャルド・ジャズの人気となる。

フリージャズが色々な議論を生み、不条理の世界（不調和音・リズムの急激な反転などのテクニック）既存への挑戦とも感じられる。ジャズとサンバのミックス（ジャズサンバ）、ハード・バップ+ロックしたジャズ・ロックなど乱立した時代。

1970年代

ジャズとロックのフュージョンが爆発的記録となる。ジャンルを超えた、エレクトリック・サウンドと強烈なサウンドを前面に出し、ジャズファンだけでない人気となる。

背景には1965年ベトナム戦争介入により反戦運動の高まりなど、音楽も巻き込まれてゆく。

1980年代以降

フュージョンの中、コンテンポラリー=ポップ・ジャズとポストモダンに分類されるかも知れない。コンテンポラリー・ジャズはポップス・ロック・エレクトリックやクラシックなどと取りいれていて本来のジャズからは離れてゆく。

こうした中でジャズの伝統回復を図りながら、現代的な感覚を取り入れる動きが生まれた。また、新たなビッグバンドは編曲能力が重視されて来る。

JAZZのスタイルは連続していて、そのピークから発展してきました。一方で過去のスタイルも絶えてしまうことなく続いています。これまでのミュージシャンは当初ビッグバンドに属したり、グループに加わったりしながら腕を磨いていて、ようやくリーダーとなることが出来ました。これが基本コースでした。音楽大学を卒業して即座に自信のグループで発表することも日常的になっています。

演奏もライブ中心からリモート録音やミキシングを加えたり、レコードからCD、そうしてインターネットによる中継や配信など、百科騒乱で、でも形を変えながら聞く耳に届けています。

注) 多くの場合、日本ではレコーからの情報が多く、アメリカ等と時間的なずれがあるようだ。